

# 「のに」で言いさす文

熊野七絵

## 1. はじめに

「のに」は、「 $S_1$ のに $S_2$ 」の形で、逆接的な論理関係を示す接続助詞とされている。しかし、実際の談話では、次のように後件がなく「のに」で言い終わっている文をよく使っていることに気づく。

- (1) 「安月給でそこまではたらくことないのに。」 (東京)
- (2) 「もう、せっかく日本から来たのに。」 (ロンバケ)
- (3) 「なんだ、泊まってくりゃいいのに。」 (東京)

実際に談話における「のに」の用例をシナリオなどから収集してみたところ、全用例(122例)の85% (103例)が「のに」で終わっている文(以後「言いさし文」<sup>※1</sup>)であった。「 $S_1$ のに $S_2$ 」の構造をもつ文(以後「完全文」)は残りの19例のみであり、談話の中では言いさしの形のほうが圧倒的に多いことが予想される。

高橋(1993)、白川(1994, 1995, 1996)、佐藤(1994)らは、「が、けれども、から、たら、れば」などの接続助詞による言いさし文について、完全文における接続助詞としての機能からは単純に解釈できない用法や、言いさし独自の機能や特徴があることを指摘している。日本語教育の観点からは、佐藤(1994)が、言いさしになると意味が変わるものがあるのに、日本語学習者は接続表現と捉えるため、次に続くものを期待すると指摘している。また、省略、婉曲表現という不用意な説明を鵜呑みにし、不適切な誤用を生み出してしまう可能性もあるという。

前件のみしか言語化されていない「のに」の言いさしについても、日本語学習者にとっては解釈や使用が困難であるかもしれない。「のに」の言いさし文を単なる後件の省略と考えていいのだろうか。それとも、完全文とは異なる機能を担っているのだろうか。また、言いさしという形式が談話で多用されるからには、そこに何らかの積極的な理由があるのではないだろうか。そこで、本研究では、「のに」の完全文と言いさし文の特徴をさまざまな観点から考察し、言いさしという観点から「のに」文を再検討していきたい。

## 2. 「のに」の完全文の論理構造

### 2-1 「のに」の完全文の基本的な論理構造

多くの教科書に見られる「のに」の一般的な説明は、「 $S_1$ のに $S_2$ 」で、話者の持つ前提に反する事態が $S_2$ にくるということである。この典型的な論理構造は、小泉(1987)や戸村(1988)などで検討されており、条件文に基づく前提との論理関係を次のように示すこ

とができる。

<基本的な論理構造>

前提 : P ならば Q

S<sub>1</sub>のにS<sub>2</sub> : P の時 -Q

たとえば、次の例(4)は、「俺のほうかうまい(P)」ならば「ほめてくれる(Q)」という話者の前提があり、「俺のほうかうまい(P)」時に「ほめてくれない(-Q)」という前提に反する事態が起こっていることを述べているという構造である。

(4)「俺のほうかうまいのに、ほめてもくれないっ。」 (めぞん)

前提：俺のほうかうまいならば、ほめてくれる

## 2-2 「のに」の完全文の修正された論理構造

しかし、このような論理関係で前提を想定してみると論理にズレが生じるものもような例も多い。

(5) (あこがれの彼女から電話がかかってきたとき、同居している女性がでてしまい)

「初めて家に電話がかかってきたのに、出たのはアンタだ。」 (ロンバケ)

前提：？初めて家に電話がかかってきたならば、出たのはアンタではない

(6)「あんたって他人にはあたりがやわらかいのににさー、なんで親に厳しいの？」

前提：？他人にあたりがやわらかいならば親に厳しくない (めぞん)

このように単純な逆接の論理関係とは言えない例については、西川(1993)や前田(1996)が説明を試みている。

西川(1993)は、「のに」は、話し手の主観に基づいた前提とのズレを表現するために使われるといい、「PならばQ」という前提だけでは説明できない現象を話者の主観による+α(願望、予想、当然の考え)として説明している。修正された案は、以下のように示される。

<修正された論理構造>

願望：PだからQを希望する

前提： P ならばQ (+α) →当然の考え：PならばQすべきだ

予想(自分なりの一般論)：PならばQであるものだ

S<sub>1</sub>のにS<sub>2</sub>：P の時 -Q

この修正案を用いれば、多少不自然な前提が納得いくものとなり、論理的にズレがあると思われる完全文の多くが解釈できる。例えば、上に挙げた例文の前提は次のように解釈できる。

(5') 前提：初めて電話がかかってきたんだからアンタが出ないことを希望する(願望)

(6') 前提：他人にあたりがやわらかいのならば親にも厳しくないだろう (予想)

前田 (1995) は、典型的な論理関係では導けないような例をさらに挙げ、整理している。

①が従来言われていたような論理関係であり、②③④はそれでは説明が付かないものである。これらに共通するのは、「話者による食い違いの認識を表す」ことであるとしている。

- ①逆原因・理由文 「一生懸命勉強したのに、合格できなかった。」  
②非並列・対照 「兄は数学が得意なのに、弟は古典が得意だ。」  
③予想外 「合格すると思っていたのに、合格できなかった。」  
④不本意な自体を生み出した状況 「勉強しに来たのに、図書館が閉まっていた。」

(前田1996:117)

西川 (1993) も前田 (1995) も、主張の方向性は同じであると考えられる。つまり、「のに」は、話者の主観に基づく前提と食い違いがある事態の認識を示すものであると考えられる。

### 2-3 「のに」の完全文の短絡的構造

次の (7) や (8) のような例は上のような修正によっても解釈できない。これは、西川 (1993) や戸村 (1988) が短絡文と呼ぶものである<sup>2)</sup>。

(7) 「こちらからご挨拶に伺わなきゃなりませんのに、申し訳ありませんでした。」(鬼)

(8) 「君を信頼して、まかせたのに、いったいなにをしている！」 (林檎)

表面的には、 $S_1$ ののにに $S_2$ の形に見えるが、実は $S_2$ が先行文脈に現れていて、前提と逆接関係にあるわけではない文 $S_3$ が付加されてしまっているのである。(7)の場合「こちらからあいさつに伺わなければならない (P)」ならば「伺うべき ( $Q + \alpha$ )」時に、「伺っていない ( $-Q$ )」という先行文脈があり、それについて「申し訳ない (R)」というコメントが続いているというわけである。

< 「のに」の短絡的構造 >

前提： P ならば Q ( $+\alpha$ )  
( $S_2$ )  $S_1$ ののに $S_3$ : ( $-Q$ ) P の時, R

以上完全文の「のに」の論理構造について、先行研究での指摘を中心にまとめてきたが、いわゆる典型的な逆接という論理関係がみられるものは、実は「のに」の完全文の一部にすぎないということがわかる。「のに」が話者の主観による前提とのズレを示す指標であるというのはすべての完全文に共通しているが、修正された論理構造や短絡文の解釈には、話者の前提に対する聞き手の解釈が必要となる。その前提自体が話者の主観によるものであることは見過ごせない。典型的な逆接の論理構造で教えられた日本語学習者にとって話者の主観による前提を思いめぐらせて解釈するというのは、容易であるとは言えないだろう。

### 3. 「のに」の言いさし文の論理構造

構造として「のに」で終わる例があることは、「のに」を扱った多くの研究でも指摘はされている(西原1985, 戸村1988, 今尾1994, 前田1995)。しかし、その説明は単に構造上の「後件の省略、あるいは倒置」であるとされている。言いさし文は単に完全文の後件の省略と考えることができるのだろうか。前田(1995)は、前件から後件が予測可能だから後件の省略が可能になるとしているが、完全文においてさえ、その論理構造は単純な逆接関係だけではなく、話者の主観による前提にもとづいているため、必ずしも前提は明白ではない。そこで、「のに」の言いさし文の論理構造について考えていきたい。

「のに」の完全文の形式を「 $S_1$ のに $S_2$ 」とすると、「のに」で終わる形式には、構造上次の3つのタイプが考えられる。

完全文	$S_1$ のに $S_2$	
言いさし文	① $S_1$ のに ( $S_2$ )。	省略
	② $S_2$ 。 $S_1$ のに。	倒置
	③ ( $S_2$ )。 $S_1$ のに。	先行文脈

#### 3-1 省略： $S_1$ のに ( $S_2$ )。

通常、言いさし文というのは後件が省略されたものと捉えられ、「 $S_1$ のに ( $S_2$ )。」のような構造になっていると考えられる。しかし、本論では省略という考え方には異議を唱えたい。省略というからには、文脈上明らかに補えるものであると考えられる。だとすれば、言いさしの「のに」の後件は全て補えるのであろうか。例えば、冒頭で挙げた(1)(2)(3)のような例は、文脈から後件を補うことはできるとしても、発話としては不自然になる。なぜなら、後件は場面文脈上既に提示されていると考えられるため、繰り返すのは余剰だからである<sup>43</sup>。先行文脈に $S_2$ が現れている場合は、これを補ってしまうと構造は「( $S_2$ )  $S_1$ のに $S_2$ 。」となってしまう。つまり、後件が先行文脈に現れているのであって、「のに」の後ろにあるべきものが省略されているわけではないと考えられる。

- (1') 「安月給でそこまではたらくことないのに、働いている。」 (東京)  
(2') 「もう、せっかく日本から来たのに、待たされる。」 (ロンバケ)  
(3') 「なんだ、泊まってくりゃいいのに、帰ってきた。」 (東京)

#### 3-2 倒置： $S_2$ 。 $S_1$ のに。

倒置とは、次の例のように、 $S_2$ の部分が前に言語化されている場合である。

- (9) 「すっばかされちゃった。」…「ホテルで落ち合う約束してたのに。」 (東京)  
(9') 「ホテルで落ち合う約束してたのに、すっばかされちゃった。」

これは、一見前件と後件の位置が交替しただけに見え、「倒置」という言葉で片づけられがちであるが、注意が必要である。一つの文に何らかの発話意図があるとすれば2文になっていることで、すでに従属関係ではなく、独立した文としての発話モダリティーを獲得していると言えるであろう。(9)と(9')では話者の心的態度に差があると感じられる。

### 3-3 先行文脈：(S<sub>2</sub>)。S<sub>1</sub>の。

談話における言いさしの「のに」の多くは、S<sub>2</sub>が、先行する場面や文脈に示されている場合である。

(10) (結婚式当日に花婿に失踪された先輩に結婚の話をついしてしまって)

「ごめんなさい、朝倉さんが他の女と結婚したっていうのに…。」 (ロンバケ)

(11) そっけない彼に「店あっても、送ってくれたことあったのにね。」 (ロンバケ)

(12) 前の彼女とその子供を養うと宣言する夢を見て「なんて夢見たんだ…俺があいしてるのはさとみなのに……」内言 (東京)

(10)の例の場合、「結婚相手が他の女と結婚したのならば、結婚の話は口にすべきではない」という前提に対して、実際の行動として口に出したということが前提に反するS<sub>2</sub>にあたる。つまり、文脈に話者の前提に反する事態(S<sub>2</sub>)が実際に示されているのであるから、後件にS<sub>2</sub>を再度提示するのは当然余剰である。だからこそ、後件のない言いさしの形式がとられるのである。

しかし、談話上明確な形でS<sub>2</sub>が存在するとは限らない。逆に、S<sub>1</sub>が言いさしで提示されることによって、話者の前提と食い違う事態が先行文脈にあるということが認識される場合もあると考えられる。例えば、(11)では「送ってくれことあったのに」という言いさし文を提示することによって、「以前は送ってくれたことがあったんだから今も送って欲しい」という前提を聞き手に想起させ、先行文脈の中で「送らない」という事態の部分が話者の前提と食い違うのだということへの認識を促すとも考えられる。

一方、話者自身の独り言などの場合は、先行文脈に示された事態が自分自身が想定している前提と食い違っているという認識を示すため、意外、予想外、希望と異なるなどの話者の心的態度を表すことになる。例えば(12)の場合は、話者自身が夢を見たということに対して、「今あいしているのはさとみなだから、前の彼女といっしょになるなんていう夢を見るべきではない」という前提に関連づけられ、意外、不本意であるという話者の心的態度が表わされると考えられる。

以上みてきたように、「言いさし」の「のに」はS<sub>1</sub>とS<sub>2</sub>の構造上も、完全文とは異なり、また単なる省略ではないといえる。倒置にも先行文脈にも共通することは、S<sub>1</sub>の後にS<sub>2</sub>が来るのではなく、S<sub>2</sub>(話者の前提とズレのある事態)が文脈上先に示されていて、それに対してS<sub>1</sub>(話者自身の前提PならばQにおけるPの部分)が言語化されるという形を取っていることである。

これらの特徴から、「言いさし」が用いられるのには以下の二つの積極的な理由があると考えらる。

- 1) 先行する場面や文脈上に $S_2$ が表現されている場合、 $S_2$ を言語化して再度加えること自体が余剰になるため、必然的に言いさしの構造をとることになる。
- 2) 話者の前提と食い違う事態が先行する文脈に現れたとき、話者が自分の前提と関連づけ、食い違いがあると認識していることを示すという機能を持つ。話者自身にとっては、前提を示すことにより、話者の前提と食い違う事態に対する話者の心的態度を表すことになる。聞き手に対しては、さらに話者の前提を想起させ、起こった事態と関連づけさせるという機能を果たすのである。

#### 4. 「のに」の完全文と言いさし文

ここまで、「のに」の完全文と言いさし文の論理構造をそれぞれ考察し、両者には論理構造上の違いがあること、そして「のに」が言いさし文である必然性を指摘してきた。ここでさらに、「のに」の完全文と言いさし文の特徴の違いをさまざまな観点から確認していきたい。

##### 4-1 共起要素

教科書では、「のに」は、普通体が続くとされることが多く、丁寧体との共起を指摘しているものは少ない。前田(1996)も「のに」は丁寧体で共起しにくいことを指摘している。確かに接続助詞としては一般的には普通体で接続することがほとんどだろう。

しかし、言いさしの「のに」の場合は、実際に教科書([INTEGRATED SPOKEN JAPANESE I Volume 1, 2])の例文に次のように丁寧体と共起している例がある。従属節と比べて丁寧体との共起の可能性がより高いと言えるのではないだろうか。

(13) 「私は真似をするつもりなんかちつともないんでございますのに。」

(14) 「いくつもりなんかちつともありませんでしたのに」

また、言いさしの「のに」は、「ね、よ、か、な、さ」などさまざまな終助詞とも共起する。

(15) 娘の写真を見ながら「素直ないい子だったのにな。」 (めぞん)

(16) 「中身はなーんにもかわってないのにね。」 (ロンバケ)

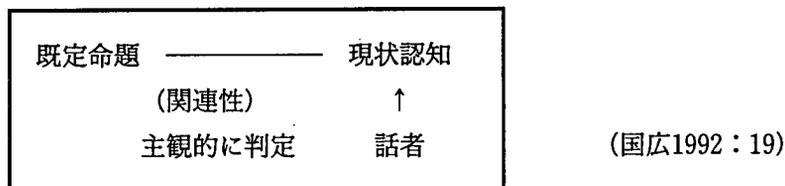
つまり、従属節にはあまりあらわれず、文末に多く見られる形式と共起するということは、言いさしの「のに」は、完全文における接続助詞としての「のに」よりも独立文に近い特徴を示しているといえるだろう。

##### 4-2 意味・機能

完全文における「のに」の機能は、 $S_1$ と $S_2$ には逆接(話者の主観による前提と食い違う事態を示す)の論理関係があるということを示す指標となることである。

言いさし文における「のに」の機能は、 $S_2$ という話者の前提と食い違う事態に対して、「 $S_1$ のに」を提示することで、話者の主観的な前提と事態を関連づけ、認識させることである。その食い違いに対する話者自身の認識を表出する場合と、聞き手に認識を促す場合がある。

このような機能は、国広 (1992) で指摘された「のだ」は「既定命題」ということと関わっていると考えられる。これは、ある現状を認知するという主体的行動を行い、それと関連があると“主観的に判定される”既定命題を「のだ」のまえに提示するということである。



おそらく「のに」についても、ある事態 ( $S_2$ ) を認知し、それに関係のあると主観的に判定される既定命題 ( $S_1$ ) を「のに」の前に提示するという手順であろう。「のだ」文の現状は非言語的に認知されるのが普通であり、時に言語表現化されることがあると考えるべきであると指摘されている。これが言いさしの「のに」が多用されることともかかわっているのかもしれない。

### 4-3 文脈依存性

「のに」文は、前提に基づいて成立するという自体、文脈依存性の高い形式であるといえる。完全文においても言いさし文においても、前提が話者の主観にもとづいているため、聞き手側が前提を読みとるには、文脈からの情報が必要となる。

「のに」の言いさし文はさらに文脈への依存性が高い。談話中に「言いさし文」が多いのは、前にも述べた様に、談話文脈に現れる事態を規定事実としてそれが話者の前提と食い違うものだとコメントされるという構造を持つからである。つまり、論理構造自体が文のレベルだけでなく談話場面、文脈に広がっているのである。

野田 (1995) は、「私があなたに今ここで」という発話の現場を基準にした「現場依存の視点」と、言語化されている文脈によって設定された場を基準としている「文脈依存の視点」を区別している。言いさし文の「のに」は談話の現場において、先行する場面文脈を話者自身の主観による前提と関連づける働きをしているので「現場依存の視点」をとっているといえるだろう。それに対して、完全文の「のに」は逆接文の論理関係という「文脈依存の視点」をとっているといえる。野田 (1995) が、「現場依存の視点」は独立文や複文の主節などにみられ、「文脈依存の視点」は従属節などにみられると指摘していることを逆手に取ると、言いさしの「のに」は、文脈依存度の視点からも独立文に近づいているとも

言えるだろう。

#### 4-4 モダリティー

言いさしの「のに」は、話者の主観のはいった前提をいきなり提示するということで、さまざまな発話意図を持ちうる。言いさしの「のに」が、完全文の「のに」にはあまり感じられない「意外、遺憾、不満、不本意、驚き、呆れ、恐縮、後悔、疑問、願望、当然、非難、恨み、詰問」などのニュアンスが現れることは、先行研究でも指摘されている（西川1993, 西原1985, 今尾1994, 前田1996）。

完全文と言いさし文をくらべると、「のに」の本質的な意味は共通であっても、やはり、発話時の話者の心的態度の現れに差があると感じられる。

- |   |        |
|---|--------|
| (1) 「安月給でそこまではたらくことない <u>のに</u> 。」        | (東京)   |
| (1') 「安月給でそこまではたらくことない <u>のに</u> 、働いている。」 | (東京)   |
| (2) 「もう、せっかく日本から来た <u>のに</u> 。」           | (ロンバケ) |
| (2') 「もう、せっかく日本から来た <u>のに</u> 、待たされた。」    | (ロンバケ) |
| (3) 「なんだ、泊まってくりゃいい <u>のに</u> 。」           | (東京)   |
| (3') 「なんだ、泊まってくりゃいい <u>のに</u> 、帰ってきた。」    | (東京)   |

言いさし文のほうには、(1) 呆れ、非難 (2) 不満 (3) 意外などのニュアンスが感じられるが、完全文になるとそのようなニュアンスはかなり薄れる。モダリティーのレベルからみても、言いさし文の方が独立文に近づいた働きをしていることが分かる。

以上、「のに」の完全文と言いさし文の特徴の違いを論じた。「のに」の言いさし文と完全文は連続性をもっている。しかし、「のに」の言いさし文は、論理構造、共起要素、意味・機能、文脈依存性、モダリティー、どの観点からも「のに」の完全文とは異なり独立文に近い特徴を備えていると言える。言いさしの「のに」の扱いについても留意する必要があるだろう。

そこで、次に、完全文と言いさしの「のに」が実際に学習者にはどのように提示、説明されているのかを検討し、問題点を探りたい。

### 5. 教科書における「のに」の扱い

完全文と言いさしという形で、連続性を持ちながらも、それぞれの論理構造や機能・用法をもつ「のに」が、学習者にはどのように提示され、教えられているのであろうか。教科書の中での「のに」の扱いを検討していくことによって、その問題点を探りたい。

日本語教科書の中で、「のに」を項目として提示しているもの、つまり「のに」が含まれる表現を初出として扱っているものとして、初・中級教科書29冊が、該当した。うち、英語で説明されているものが14冊、原則的に日本語や例文で説明されているものが15冊であ

る。初出での説明とその後の提示のされ方の関連を探るため、中・上級教科書や学習者用参考書での扱いにも適宜触れていく。

まず、完全文、言いさし文がどのように提示されているかを確認した。全体のうち、同じ教科書の中で完全文、言いさし文どちらとも扱っていたものは7冊で、うち2冊は本文中は完全文の説明で、練習問題に説明はなく言いさしの練習もとりこまれているものであった。残りの22冊のうち、完全文のみのものが16冊、言いさし文のみのものが6冊であった。傾向としてみられたのは、完全文のみのものは、英文のものよりも、日本語説明の教科書のほうに多く見られ(10冊：6冊)、さらに、両方提示してあるものは英文のものが圧倒的に多かった(5冊：1冊)。言いさし文のみで提出されているものについても、英語の方は項目の説明や練習もあるが、日本語のものは談話中の要素としてそのままの形でとりだしたもので、意図的に項目に入れているという感じではないものが多い。英文で書かれたもののほうが両方使っている割合が高いのは、おそらく、英語で訳した場合に、同じ説明や訳ができないからだと思われる。具体的に言うと、完全文の場合は前提に反する事実を述べるといった説明をするとともに、“although, in spite of, even though”のような訳がつけられているが、言いさし文の場合、同じ訳では不自然で、むしろ“If only such and such were, Too bad such and such is not, would be good if”などの訳が付けられるというわけである。逆接の標識としての「のに」が文末に残ることによって、話者のなんらかの前提と事実とのつながりを暗示させるというのは、日本語母語話者には類推できることであるが、学習者の母語ではそうであるとは限らないことを認識しておくべきである。日本語の教科書では、初級では完全文でしか扱っていないのに、中級あたりになると本文中に何の説明もなく言いさし文がちりばめられていることが多い。もちろん、学習者の日本語のレベルからいって英語の説明と同じレベルの説明を直接法に求めるのは酷であるし、例文を中心に提示していく場合、論理関係のはっきりした基本用法から提出するのは当然のことでもある。しかし、それだけではなく様々な問題がある。項目の提示や説明の適切さについて、具体的に検討したい。

#### 1) 完全文の論理関係にズレがないか

(17) 「雨が降っているのに、大変ですね。」

(18) 「わざわざ見に行ったのに大変でしたね。」

これらはどちらも学習者が最初に出会う本文会話の中の例である。確かに自然な発話ではあるが、この例は前件と後件に論理的な関係にズレがある。「のに」の後件は言外にあり、学習者にとっても解釈が難しいのではないだろうか。

#### 2) 完全文と言いさし文の説明に連続性があるかどうか

項目、説明などでは完全文としてしか説明していないのに、練習でいきなり言いさし文

が登場するものがある。

また、次のような例は言いさし文が本文中に一回出るだけで、「のに」の論理構造の把握が難しいのではないかと思われる。

(19) (母親にテレビを消すように言われて)「いいところのに」

完全文と言いさし文は構造的にも、発話意図として持つニュアンスも異なるため、練習時の教師の適切な指導が必要となる。

### 3) 説明が部分的で不十分ではないか

例えば、「言いさしの「のに」は不満を表す」といった表現は、誤解を招きかねない。言いさしの「のに」は全て否定的な感情を表すわけではない。かたよった例を一般化せず、多様なパターンの例を提示するよう心がけるべきだろう。

### 4) 言いさし文の型が限定されていないか

「～ばいいのに」「～ば～たのに」のようにレバの活用練習として言いさし文の「のに」が導入されているものもある。「のに」の一般的な文型から学習者がつくり出すのは難しいが、よく使われる便利な表現であるのでこの言い回しになれると言うことでは非常に有効である。しかし、言いさしの形はこのパターンだけとはならないよう段階的にバリエーションを導入していくことが必要であろう。

### 5) 類似表現との比較を検討しているか

「ので」「ても」「けれども」のそれぞれで比較されているものはある。その場合、相違点と共通点を明確にするよう類似表現間での位置付けを試みる必要がある。

以上具体的な指摘をしてきた。しかし、実際の教科書というのは一つの項目だけを扱うものでもなく全体と関連し合っていて、各項目を過不足なく充実させるのは難しい。とはいえ、項目に必要な最低限な要素は取り込むべきであろう。談話では言いさしの「のに」の頻度が高いが、理解の便から言えば、構造と前提が明示的な完全文から提示するほうがわかりやすいであろう。言いさしの文は、よく使う表現、型を中心に、具体的な談話例の中で提示し、バリエーションを増やしていけばよい。失望表現、驚きの表現など感情表現とからませっていくのも、モダリティ要素の取り込みということに役立つかもしれない。

## 6. おわりに

本論では、まず、談話場面では言いさしの「のに」が、よく使われていることを指摘し、日本語学習者が理解し、使いこなせるようになるためになにが必要なのかを探るため、「言いさし」の「のに」について日本語学的視点、日本語教育学的視点から考察した。まず、「のに」の完全文と言いさし文の論理構造を確認した。次に、完全文と言いさし文を共起

要素、意味・機能、文脈依存性、モダリティーの観点から比較、考察し、「のに」の言いさし文は、談話の中で機能するべくさまざまなレベルで完全文とは異なり、独立文にちかい特徴をもっていることがわかった。

一方、実際の教科書の中で、「のに」がどのように扱われているかを分析、考察した。完全文と言いさし文の提示を中心に問題点等を考察した。詳しくは述べなかったが、教科書毎に独創的な特徴があり、また欠点もある。長所・短所を見極め、教師側がうまく補いながら活用していかなければならない。

言いさしの「のに」を使用している超級学習者から「何となく聞くから使ってる。でも、意味はわからない。」という声をきいたことがある。日本語母語話者が込める「意外、驚き、不満、後悔」などのニュアンスを理解し、使えるようになるには、どうすればいいのだろうか。談話機能については更なる考察が必要であろう。母語話者にとっては当たり前の「言いさし」は、省略として片づけられがちであるが、独自の特徴をもち、前提、論理構造、文脈、モダリティーなど複雑な概念が有機的に結びついたものであることを留意しなければならない。

## 例文の出典一覧

- 東京＝『東京ラブストーリー①、②、③』柴門ふみ 1995 小学館文庫  
ロンバケ＝『ロングバケーション』北川悦吏子 1996 角川書店  
鬼＝『渡る世間は鬼ばかり1』橋田壽賀子 1996 集英社文庫  
めぞん＝『めぞん一刻 ①、②』高橋留美子 1997 小学館  
林檎＝『山田太一作品集16ふぞろいの林檎たち』山田太一 1988 大和書房

## 注

- 1) 白川 (1996) では、接続節によって文が終わっているものを「言いさし」と一括りにすることの安易さを指摘し、判別の条件にもとづいて「言い残し」「省略」「言い終わり」に分類している。このような視点は非常に重要であると考えられるが、本稿では「のに」の言いさし文の下位分類が目的ではないため、「S<sub>1</sub>のにS<sub>2</sub>」の構造を持つ文を「完全文」とし、「のに」で言い終わっている文を「言いさし文」と呼ぶこととする。
- 2) 前田 (1996) は、既に述べた逆原因などの従属的用法とは区別し、このような文を非従属的用法に位置づけている。非従属的用法にはこのよ短絡と後件省略が含まれている。
- 3) 情報の反復を避けるということは、今尾 (1994) でも指摘されている。「後件を省略することにより残された前件が強調された例。意外感や驚きを端的に表すため、旧情報の反復を避けて冗長さを排除し前件の要素が一段と際だてられている。」(p. 154)これに対して、本稿では、後件が意図的に省略されているという立場はとっていない。先

行文脈に後件にあたる部分があるので、前件のみが言いさしの形で提示されるのが当然であり、言いさしの形だからこそ意外感や驚きが表されるのだと捉えている。

## 参考文献

- 今尾ゆき子 1993 「「ノニ」の機能」『名古屋大学人文科学研究』第22号 名古屋大学大学院文学研究科 pp. 75-85
- 今尾ゆき子 1994 「『ケレド』と『ノニ』の談話機能」『日本語教育論集 世界の日本語教育』第4号 国際交流基金日本語国際センター pp. 147-163
- 岩崎卓 1994 「ノデの視点とノニの視点—トイウノデとトイウノニから—」『現代日本語研究』第3号 pp. 55-72
- 国広哲弥 1992 「「のだ」から「のに」・「ので」へ—「の」の共通性—」カッケンブッシュ 寛子ほか（編）『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会 pp. 17-34
- 久野暲 1978 『談話の文法』大修館書店
- 小泉保 1987 「譲歩文について」『言語研究』91号 日本言語学会 pp. 1-14
- 才田いずみ 1980 「「のに」と「ても」」『紀要』3 アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター pp. 37-47
- 佐藤勢紀子 1994 「中上級日本語教育における中断文『・・が/けど』の扱い方」『東北大学留学生センター紀要』第2号 東北大学留学生センター pp. 17-25
- 白川博之 1994 「理由を表さない『カラ』」仁田義雄（編）『複文の研究（上）』くろしお出版 pp. 189-219
- 白川博之 1995 「タラ形・レバ形で言いさす文」『広島大学日本語教育学科紀要』第5号 広島大学教育学部日本語教育学科 pp. 33-39
- 白川博之 1996 「『ケド』で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』第6号 広島大学日本語教育学科 pp. 9-17
- 高橋太郎 1993 「省略によってできた述語形式」『日本語学』12-10 pp. 18-26
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- 寺村秀夫 1991 『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版
- 戸村佳代 1988 「日本語における二つのタイプの譲歩文—「ノニ」と「テモ」—」『文芸言語研究言語編』15 筑波大学文芸・言語体系 pp. 124-133
- 西川早苗 1993 「譲歩文とは何か—「のに」と「ても」を中心に—」広島大学教育学部日本語教育学科卒業論文
- 西原鈴子 1985 「逆説的表現における三つのパターン」『日本語教育』日本語教育学会 pp. 28-38
- 仁田義雄 1987 「条件づけとその周辺」『日本語学』6号 明治書院 pp. 13-27
- 野田晴美 1997 『日本語研究叢書9 「の（だ）」の機能』くろしお出版 Pp. 273

- 野田尚史 1995「現場依存の視点と文脈依存の視点－日本語の複文・連文でボイス・テンス・ムード形式がとる視点－」仁田義雄（編）『複文の研究（下）』くろしお出版 pp. 327-351
- 前田直子 1995「逆接を表わす「～ノニ」の意味・用法」『東京大学留学生センター紀要』第5号 pp. 99-123
- 宮地裕 1983「二分の順接・逆説」『日本語学』2号 明治書院 pp. 22-29
- 山岡政紀 1995「従属節のモダリティー」仁田義雄編『複文の研究（下）』くろしお出版 pp. 309-326

## 対象とした教材（出版年順）

### <教科書>

- 『Intensive Course in Japanese Elementary Course 1, 2』1970 高橋一夫他 対外日本語教育振興会編 ランゲージサービス
- 『INTEGRATED SPOKEN JAPANESE I Volume 1, 2』1971 Kenneth D. Butler, Osamu Mizutani アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター
- 『JAPANESE FOR TODAY』1973 吉田弥寿夫他 学研
- 『BASIC JAPANESE -A REVIEW TEXT』1975 Kenneth D. Butler, Takagi Kimiko 他 アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター
- 『日本語 1』1977 国際学友会日本語学校国際学友会
- 『An Introduction to Modern Japanese』1977 水谷修、水谷信子 The Japan Times
- 『日本語初歩II』1982 鈴木忍、川瀬生郎 国際交流基金 凡人社
- 『Japanese Made Possible』1982 竹内博子 凡人社
- 『A COURSE IN MODERN JAPANESE』1983 名古屋大学総合言語センター日本語学科編 名古屋大学出版会
- 『日本語表現文型 中級II』1983 寺村秀夫他 筑波大学日本語教育研究会編 凡人社
- 『外国学生用 基礎日本語』1984 森田良行他 早稲田大学日本語研究教育センター編 早稲田大学日本語研究教育センター
- 『技術研修生のための日本語③』1984 国際協力事業団 国際協カサービスセンター
- 『LEARN JAPANESE Volumell』1984 John Young, Kimiko Nakajima-Okano University of Hawaii Press
- 『日本語でビジネス会話 中級編』1987 日米会話学院日本語研修所 凡人社
- 『中国からの帰国者のための生活日本語II』1987 文化庁
- 『文化初級日本語II』1988 文化外国語専門学校日本語科編 文化外国語専門学校
- 『日本語でビジネス会話 初級編：生活とビジネス』1989 日米会話学院日本語研修所 凡人社

- 【総合日本語中級前期】1989 水谷信子 アルク編 凡人社
- 【JAPANESE FOR EVERYONE】1990 名柄迪他編 学研
- 【初級 日本語】1990 東京大学附属日本語学校編 三省堂
- 【JAPANESE FOR BUSY PEOPLE II】1990 The Association for Japanese teaching  
講談社
- 【テレビ日本語講座初級IIスキット 続ヤンさんと日本の人々 シナリオ】1991 国際交  
流基金
- 【中級から学ぶ日本語】1991 荒井礼子、太田純子、大藪直子、亀田美保、木川和子、長  
田龍典、松田浩志 研究社
- 【初級日本語テキスト 日本語で話そう4 初級から中級へ】1992 高橋和子、広瀬万里  
子 ELEC
- 【Communicating in Japanese コミュニケーションのための日本語入門】1992 能登博  
義 創拓社
- 【日本語会話中級I】1993 高柳和子、遠藤裕子、袴田陽子、武井直紀、渡辺尚子 TIJ東  
京日本語研修所
- 【日本語会話中級II】1993 高柳和子、遠藤裕子、袴田陽子 TIJ東京日本語研修所
- 【実用ビジネス日本語－成功への10章】1993 高野岳人、矢嶋美加子、原啓二、古市輝子  
アルク
- 【新日本語の基礎II】1993 海外技術者研修協会編 スリーエーネットワーク
- 【もみじII－ひろしまで学ぶ日本語－】1994 縫部義憲監修 広島国際センター編 広島  
県
- 【Intermediate Japanese for University Students英文中級日本語】1996 能登博義 大  
修館書店

#### <学習者用補助教材、参考書>

- 【A DICTIONARY OF BASIC JAPANESE GRAMMAR 日本語基本文法辞典】1986  
Seiichi Makino, Michio Tutui The Japan Times
- 【外国人のための日本語例文・問題シリーズ6 接続の表現】1988 横林宙夜、下村彰子 荒  
竹出版
- 【日本語運用力養成問題集－初中級用－③】1989 寺村秀夫監修 大塚純子、岡野喜美子、  
川口さち子、浜由美子 凡人社
- 【ペアで覚えるいろいろなことば 初・中級学習者のための連語の整理】1996 秋本美春、  
有賀千佳子 武蔵野書院
- 【どんな時どう使う日本語表現文型500】1996 友松悦子、宮本淳、和栗雅子 アルク